



第3章

取り組みの方向性

第3章 取り組みの方向性

1 課題の整理

「食」をめぐる柏市の現状特性や市民意識の分析結果から、今後私たち市民が取り組むべき課題を整理すると、大きく次の5つの課題が挙げられます。

■課題1 食と健康への市民の関心を高める！

- 健康な体づくりには、栄養、運動、休息などバランスのとれた生活を日常化していくことが必要であり、本市ではこれまで「柏市地域健康福祉計画」などを基本に市民の健康づくりを総合的に進めてきたところです。
- しかし、第2章で示されるように本市の食をめぐる現状をみると、「食育」という言葉は多くが周知しているものの、一般市民のみならず子どもの保護者家庭においても全国平均に比べて関心度は決して高いとは言えないのが実情です。
また、成人の朝食の欠食率は、40歳代の男性が全国平均を大きく上回り、20歳代の男性も高い状況にあります。このような傾向は、栄養バランスのとれた食事や緑黄色野菜の摂取状況においても同様であり、低位な結果となっています。
- こうしたことから、生涯にわたる健康づくりを支援するためには、改めて「食」に重点を置き、市民各層に対する情報提供や啓発活動の拡充を図り、各個人・家庭・組織における主体的な取り組みを支援・促進していく必要があります。
また、乳幼児期、就学期など早い段階から豊かな「食」を経験し、望ましい食生活の習慣化ができるよう、さまざまな体験機会の提供も求められています。

■課題2 若年層や保護者を中心に「食育」を進める！

- 食育は、すべての世代にわたってそれぞれ世代ごとの問題をふまえた確かな取り組みが求められるものです。
- 一方、柏市は地域特性として「若い世代の多さ」が挙げられ、これに連動して若者産業・若者文化が発展し、飲食店や衣料・靴小売店・理美容院など若者にまつわる業種集積も相対的に高く、その結果、市内外からも「柏＝若者のまち」というイメージが定着し、“柏らしさ”を特徴づけている一つの姿となっています。
- しかし、青年層から中年層にかけての“食生活の乱れ”は顕著であり、市民意識調査の結果に示されるように、特に40歳代の男性は全国平均を超える際立った朝食欠食率のほか、20歳代、30歳代の栄養バランスのとれた食事や野菜の摂取回数（摂取量）の少なさなど、食にかかわる多くの問題が浮き彫りになっています。
また、保護者アンケート調査の結果にあるように、食育が必要な世代として「こども層」や「保護者層」に続き、「青年層（学生・新社会人・新婚期）」も上位に挙げられています。
- このため、「若者のまち」という地域の人口特性、産業特性をふまえ、関連事業所などとも連携しながら、今後の“親づくり”の観点やメタボリックシンドローム予防の観点を含め、若者にスポットを当てた食育に重点的に取り組む必要があります。

- 同時に、“食育のメインフィールドは「家庭」が第一”という市民意識調査の結果をふまえ、次代の担い手となる子どもたちの食育に大きな影響を与える保護者においても、食育推進の必要性は強く認識されているところであり、保護者の要請に応じられるよう、保育園、幼稚園、学校など関係機関と連携を図りながら効果的な食育を推進していくことが必要です。

課題3 食卓を通じたコミュニケーションを深める！

- 食育のフィールドは、「家庭」という調査結果がでているように市民の多くは、家族そろって食卓を囲む重要性を指摘しています。肉体的な健康に限らず、精神的側面からみても食卓を囲む者同士がお互いの変化にいち早く気づく機会は「食卓」ではないでしょうか。
- 「朝食に何を食べるか」「そして誰と食べるか」みんなで食卓を囲めば、料理も主食・副菜・主菜がそろった栄養バランスがとれ、また規則正しい生活リズムも期待できます。
- そのため、食育や健康について語り合える知識を高め、理想的な栄養バランスの食事を摂るよう取り組んでいくとともに、皆で食卓を囲む機会を設けるなど食を楽しむ方法（調理技術も含め）を充実させていく必要があります。

課題4 食の安全・安心のための正しい知識を深める！

- 現在の情報化社会においては、マスメディアなどの各種情報媒体を通じて「食」に関する情報が氾濫しており、個々に適した正しい情報を選択することが難しい状況です。また、昨今、健康被害を及ぼす材料の混入や偽装表示など食品の安全・安心を脅かす問題、事件が多く生じており、消費者の安全に関する不安や関心が高まっています。
- そのため、生産者や食品関連事業者は安全安心な食料生産と供給、適正な食品表示情報に努め、また食品安全行政もより厳格な指導・監視が求められます。
- 一方、市民一人ひとりも、食生活や健康に関する正しい知識を持ち、自らの判断で食を選択する力を身につけ、健康的な食生活を実践していく必要があります。



○街の食育ファイター！

市民の皆さんに食育の機会を提供しているのは、学校や保健センター、市役所だけではなく、生活の身近な場所で、様々な立場の人たちが、皆さんのより健康的で楽しい生活を応援すべくがんばっています。

このコーナーではそうした街の元気な食育ファイターをご紹介します。

※今回取り上げる事業には単年度のみ事業も含まれます。

課題5 食を通じ地域産業とのつながり（活性化）と環境への配慮を広げる！

- 本市は消費の地と生産の地が近接し、食育を推進する場が豊かにあり、市内で生産された農畜産物の一部は、直売所や量販店の産直コーナーなどで販売され、新鮮で安全・安心な農畜産物の提供を可能にしています。
また、ベッドタウンとして発展してきた柏市はスーパーやコンビニエンス・ストア等の商業や飲食店に代表されるサービス業などの生活産業が盛んで、好きな時に好きなものを食べられるという生活利便性を市民に提供してきました。
- その一方で、食料の生産が自然の恩恵の上に成り立っていることや食生活が「食」にかかわる人の労力によって培われていることへの意識が希薄となっています。賞味期限切れの食物をすぐ捨てたり、自分で食物を調達せず、与えられた食物に「これは嫌い、これはまずい」といい、食べることに感謝も喜びも失っている、これでは『食の品格』は失われます。『食の品格』は、気取ったマナーや贅沢を追求するのではなく、「いただきます」という食物の命をもらうことへの感謝、生産者への感謝、そして食事を用意してくれた人への感謝の言葉からうまれます。そのため、市民が柏でとれる農畜産物や食品が作られる過程や方法等を知り、食べることへの感謝の気持ちを養い深めることが重要であり、食の提供者などとの一層の交わりが求められます。
- また、こうした市民の意識と行動を通じて農業や生活産業をはじめとする食の提供者とのつながりを広め、地域産業の活性化を促していく必要があります。



①光ヶ丘商店会・麗澤大学 ～食を通じて市民と留学生が国際交流～

平成20年11月30日、光ヶ丘商店会と麗澤大学がコラボレーションイベント「光ヶ丘国際音楽祭」を開催。地域における国際交流をテーマにしたこのイベントでは、留学生が母国料理のレシピを提供し、10カ国12種類の料理を屋台販売する催しも同時開催。中華料理にインド料理、韓国料理等々、国際色溢れる屋台の中にはあっという間に完売するところも！食はやっぱり楽しく・おいしく！この想いに国境はないようですね。なお、イベント開催後、屋台販売したレシピは、光ヶ丘商店会の実店舗で提供されました。



2 食育を通してめざすべき地域の姿（基本理念）

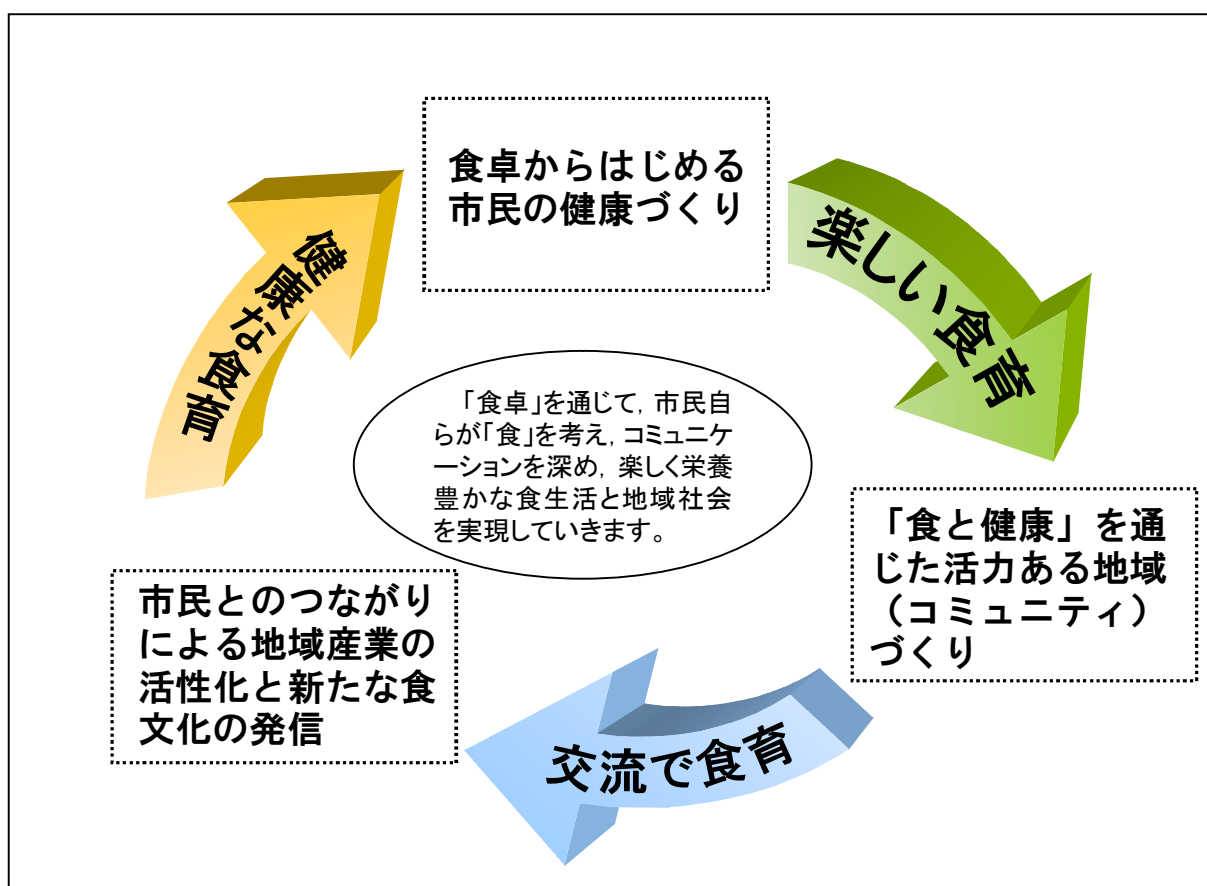
「食」は、個々の健康の維持・増進という“目的”と同時に、コミュニケーションの“手段”という側面をもっており、市民や地域の精神的、社会的な豊かさを高める有効な媒体となり得るものです。

そして、その場となるのが「食卓」であり、食を作る人と食べる人、あるいはその食卓を囲む者同士のさまざまな思いを受け止める役割を担うところと言えます。

この計画では、こうした認識のもと、家庭などの食卓を通して家族同士はもとより、広く地域の人々のつながりや絆を深め、育ててゆきたいという願いを込め、食育推進のスローガンを「食卓から始まる、健やかで元気なまち」と掲げます。

また、食育を通してめざす地域の姿を次のように設定し、家庭（個人）・学校・地域・企業などの各フィールド（主体）がそれぞれの役割を十分認識しながら相互に連携・協力し実現をめざしていくものとします。

“食卓から始まる、健やかで元気なまち”



3 計画の基本的考え方（キャッチコピー）

野菜，朝食，柏産！

『食育』の計画を進めていくうえで、目指す将来像を描いた方向性が必要となります。

現在の「食」に関する現状をふまえ、将来どのようにしていきたいか、どのようにしていくべきかをイメージしていくことが大切です。

これまで、それぞれの分野で『食育』を実施してきましたが、共通の理念をもって事業を推進していくことで、更なる充実を図ります。

そこで、食育に関する施策を総合的かつ計画的に推進し、これまで以上にその実効性を確保していくことを目指して、必要な基本的事項を定めるとともに、家庭に重点を置いた施策を推進します。健全な食生活を実践することは、健康で豊かな人間性をはぐくみ、心身ともに健やかに成長するための基礎となることはもちろんのこと、今後とも、柏市が活力と魅力にあふれた市として発展し続けていく上でも大切です。

こうした認識に立ち、食育を進める上で重要な視点が数多くある中、必要な要素として広く市民の各層にとっても覚えやすく、かつ最低限、心に留めておいて頂くことを念頭に、以下の「栄養バランス」「食生活改善」「地場産利用」の3つに集約しました。

1つ:「野菜」を意識すれば、理想的な栄養バランスに近づいてきます。

2つ:「朝食」を意識すれば、早寝早起きを含めた規則正しい生活リズムの改善や、家族で食卓を囲む機会の増加も期待できます。

3つ:「柏産」を意識すれば、地元産・国産品の利用、自給率や食の安全性の高まりも期待できます。



②高島屋ステーションモール ～大学との連携によるヘルシーフードの提案～

高島屋ステーションモールでは、レストラン街の企画として毎年夏季中に「OishiiWeek」を開催。平成20年度は、聖徳大学人間栄養学科と連携し、明日の栄養士を夢見る女子大生と各レストラン調理師が、期間限定ヘルシーメニューを共同開発。おいしく、かつ、ヘルシーな料理を提案しながら、合わせて親子料理教室やヘルシー講座も催し、市民や来店者から好評を得ました。



4 基本目標とその評価方法

柏市として私たち市民一人ひとりがめざす食育推進の目標をより具体化するために、次のよう数値目標を設定し、必ず達成すべき目標としてではなく、市民をはじめ行政など、地域のそれぞれの主体が協働し、目指すべき共通目標として次の数値を掲げます。

なお、目標に対する評価は、計画中間年度（平成23年度）、計画終了年度（平成25年度）にそれぞれ、庁内で一次評価を行い、その後、第三者組織である柏市食育推進委員会によって二次評価を行う予定です。

※1朝食欠食については、特に子どもの欠食がより大きな課題として指摘されておりますが、市内における現状値は2.3%と低い水準にあり、また、言うまでもなく本来0%を目指すべきものであるため、今回の数値目標の中には設定しておりません。ただし、その推移には引き続き注視しておく必要があるため、機会を捉えて調査・検討をまいります。

課題	評価項目	現状値	目標値	目標値の考え方
■食と健康への市民の関心を高める！	1)「食育」に関心のある人の割合	72.5%	80.0%	・全国調査結果(内閣府)によると3ヵ年で5.3%増加(「H17年69.8%」→「H20年度75.1%」) ・それを5ヵ年換算したもの。
■若年層や保護者を中心に「食育」を進める！	2)朝食欠食者の割合(20～40代)※1	13.8%	12.0%	・国や県の調査と質問文や回答肢の文言が若干異なり、市の調査と厳密な意味では比較できないが、国や県では「15%以下」と目標設定しており、柏市の場合、既に目標到達。 ・ただし、全国的な傾向をみると特に20代・30代の朝食欠食率は停滞・増加基調にあり、数値の大幅な低下は期待しにくい。よって、現状値より若干低い水準に、目標を設定した。
■食卓を通じたコミュニケーションを深める！	3)食事を楽しいと感じる人の割合	69.9%	75.0%	・一般市民アンケートにおいて「家族や親しい人と食卓を囲んで食事をする」と『理想的な食事像』として求めている市民が77.1%。 ・実際には家庭事情や勤務時間等、食育だけでは短期的に対応できない要因が想定されるため、77.1%より若干低い水準に、目標を設定した。
■食の安全・安心のための正しい知識を深める！	4)食品表示の正しい見方や食の安全に関する知識がある人の割合	66.3%	72.0%	・県計画では5ヵ年で約5%の増加を目標設定(平成18年度64.9%→平成22年度時に70%) ・よって柏市も5%程度の増加と目標設定。
■食を通じ地域産業とのつながり(活性化)と環境への配慮を広げる！	5)柏産農産物の購入率(柏産農産物を購入している人の割合)	56.1%	67.0%	・市民3人中2人に柏産農産物を買ってもらうことを目標とする。

5 基本施策

本市における食育の基本理念に加え、市民を対象に行ったアンケート調査の結果や社会環境の変化、食の安全確保に関する要望の高まりをふまえ、以下の3つを基本施策として推進していきます。

野菜

健康と栄養に関心をもつ

個人と食との関係を主な視点に、おいしく健康的に食を楽しむための前提となる健全な歯や口腔衛生への意識付けも含め、健康と栄養に関するさまざまな取組を進めて、健全な食生活の実現を図ります。

朝食

規則正しく楽しい食卓づくり

毎日の食卓は、食生活の基礎となります。核家族化や共働き世帯の増加などのような情勢の変化に対応しつつ、豊かな食生活を送るために必要な取組により、実践的な食育の推進を図ります。

柏産

魅力的で安心な、地元の食材を味わう

食にかかわる生産・流通などを知り、食品の安全性や地域社会とのかかわり、環境への配慮についての意識を高めることを図ります。



③柏歯科医師会

～モーニングスローフード作戦、歯科医院における食行動アンケート～

モーニングスローフード作戦は、柏歯科医師会と教育委員会が協力して市内小中学生約1万人を対象に行ったもので、「朝ごはんの大切さを家族へ伝えた子どもほど良い食習慣となる」関係がわかりました。また、柏市内の歯科医院における食行動アンケートでは、子育て世代の朝食欠食率が約2～5割(20代45%, 30代29%, 40代18%)になるという結果でした。家族ぐるみで食育に取り組み、それを学校や地域でバックアップしていくことが子どもの食習慣をよりよくすることにつながるようです。